

川柳集

三



正本水客・黒川紫香・丸尾潮花

川柳
句集

三
人

川柳雜誌社版



正本水客

348



黒川紫香



丸尾潮花

路
郎
先
生
に
捧
ぐ

川柳
句集

三人目次

正本水客作品

箸箱……………(二)

風うごく……………(一三)

ひとりの眼……………(二四)

女なる……………(三五)

影 法 師……………(四四)

旅 か ら……………(五二)

黒川紫香作品

親 鳥 子 鳥……………(六六)

いのちあるもの……………(七六)

旅 ころ も……………(八四)

す が た……………(九二)

丸尾潮花作品

山影の村……………(一〇二)

わだち……………(一一〇)

とじ紐……………(一二二)

白い焰……………(一二二)

ひとり……………(一四〇)

花櫛……………(一四六)

あ	流	か	ざ	家	忘
と		き	く		
が					
き	れ	船	ろ	庭	却
.....					
.....					
.....					
.....					
(一九一)	(一七八)	(一七三)	(一六七)	(一五七)	(一五二)

題

字

麻

生

路

郎

表紙

おもてがみ

戸

田

古

方

序文にかえて

丸尾潮花・黒川紫香・正本水客三君の全貌を紹介するために、曾て「川柳雑誌」に発表した「潮花を語る」（昭和三十一年十二月号）「紫香を語る」（昭和三十三年四月号）及び「水客を語る」（昭和三十三年六月号）の三つの座談会記事を採録して序文に代えることとした。

（路 彰）

潮花を語る

―語る人達―

麻生路郎・麻生霞乃・西村梨里・太田良子

霞「永い間女流作家のため、色々とお骨折り下さった潮花さんについて語る会を開くことにいたしました。潮花さんとはどんな方かということを広く知っていただきたいからです。まず、潮花さんの性格について、どなたかに語って頂きましょう」

路「そうだな、潮花君は川柳婦人友の会の肝入役として、女流作家のインタービューを

やったのと、翌号が潮花と言うやさしい名だから女と間違えられて、女の方から同姓へ宛てたような手紙を貰ったりするので、奥さんをお配させたりする事がある」といふ男だ。」

良「それだから、潮花さんはやめられないのですわ」(笑)

路「性格は確かにWが勝っているが、世の常のWと違って手八丁、口八丁、足八丁である。非常に小柄で、食事なども極小量しか摂らない。然し甘いものは相当いける。日立造船のような所に勤めていて、川柳もやれば、舞踊もやる。一寸普通人が想像も出来ない活動家である。非常に女性的であるかと思えば、親分肌のところがあるのでみんながついて来る。考えると矛盾した性格の持主のように思える。話術も相当巧みなので、直ぐ誰もが十年の知己のようになって終うといった風な人間なのだ。」

霞「此間、婦人友の会の小集句会へ出席された娘さんですが、早くからお母さんを亡くせられた方ですので、初めは、潮花さんをほんとうのお母さんのような気持ちになって手紙を書いて出していられたのだそうです。それで、男の方だとわかった時はきまりが悪かったと言っていました」

良「そんなら、潮花さんからは何も御返事がなかったんですか」

霞「勿論、潮花さんは筆まめな人だから、手紙は日に何通来ても、一人一人に長い返事を
出していられますが、潮花さんの手紙の内容は句の批評であつたり、句会への勧誘であ
つたりして、その書振りも女と思えるような構文なんです。だからそう思われたのも
無理はありません」

良「潮花さんは自分が女であると思われていることを知っていられるのでしょうか」

霞「さあ、それは潮花さんに聞いて見ないから、わからないけれど……」

路「知らないだろうな、潮花君は自分が女性のような手紙を書く事すら意識していない
だろう。普通の男だったら簡単に書く所を、可なり細々と書いている。そういう点が、
自然に相手方には女性が書いた手紙のように受取れるのだ。丁度女親が息子に書く手紙
とか、又愛人に書く手紙のように可なり親切に書いてある。然し決して色っぽい手紙で
はない。親切に、細々と書くと言う事が、何処となく女性が書く手紙と似通っているの
だ。会社から帰って夕食がすむと寝るまで手紙の返事を書く。勿論内容は川柳の句の添
削などである。」

霞「潮花さんは自分が女性的であると意識していないように女の人に話をしても、又手紙を出しても、相手が女であると言う事も、特に人のように意識していられないところがあるのです」

良「そう言うところが潮花さんのいいところですね」

梨「手紙も女性的だけど、実際に会っても、女の人にあまり異性らしい感じを与えない人ですね」

霞「其事は奥さんの花代子さんにも潮花さんによく言っていました『あんたは男女両性に作用するオバホルモンのような人だ』って」

良「私、潮花さんのおこりなされた顔を見た事ありません。いつかインタビューに来られた時も、ニコニコと少女のような可愛らしいお顔で受け答えをして下さいました」

梨「ほんとに、そうですね。永いおつきあいですけど、こわいお顔は見たことがありませんね」

霞「夕飯がすむと、直ぐ机で手紙を書くと言ふ意味の句が花代子さんにありました、潮花さんはその通り、会社から帰ると夜の十二時過ぎ、一時頃まで地方から来た手紙の返事

を書くので、毎日何通かの手紙の来ぬ日はないのですから、少々所が違っているも着くのだそうです。潮花さんの毎日の日課が花代子さんの句材になるところも面白いじゃありませんか」

路「女性との文通が多いので、時には誤解されることもあるが、梨里がおつきあいしても異性と感じないように、潮花君も女性とつき合っている、異性と感じないところがあつた。世間ではそう考えない性格の持主もいるので、そんな場合には誤解され易いのである。それは世話好きということも其原因の一つになる場合があるように思う。話題も沢山持つてる男で、話振りに何となくユーモラスな所があつて、人を飽かさない。例をあげると、潮花君が電車の停留所で車を待っていたら「一寸」と肩を叩く人があるので、見ると、知らぬおばさんが立っている。妙な顔をしていると「あんた此頃どないしてんのや」という。「おばさん誰やねん」と訊返すと「うどん屋にいてたやないかいな、此頃気楽になつてるのや、一遍遊びにおいでえな」となれなれしく云う。うどん屋は何軒でもある事だし、そんな古いことは覚えてる人もないから先方が云えばそうかと思ふ。それへつけ込んで、おばさんは「たばこ一本おくれえな」とあつさり云う。煙草位

まあ、ええわと思って、新らのピースの袋を破って一本やると「すまんなあ、もう一本おくれんか」と、又一本せしめて行つたと云う話を、会話のやりとりも潮花一流の調子で話して聞かせるのだ」(笑)

葭「潮花さんはいつ来られても、同じ話を人に聞かせた事ありませんが、何でもない事でも、ジェスチュアがうまいのか、声を立てて笑わされるのです。次に潮花さんの作品ですが、潮花さんが川雑の近作欄へ投句し出したのは昭和十三年の八月号あたりからだと思います。其時分はまだ二句組でしたが、初期の作品に「売られ行く西瓜車の座にころげ」と云うのがあります。初心の句としてはうますぎますが、まだ潮花さんのカラーは出ていませんでした。潮花さんの初期から中期にかけては、句会部幹事の花形で、お茶も汲むし、句箋もあつめるし、忙しい中で席題も作って、いつも三才に這入る。相撲吟では優勝もするので「潮花君には勝てんなあ」と皆に感心されていました」

路「無茶苦茶にセンチな句ではないが、ローマン派だったね」

梨「最近の句は少し変って来てますが、戦前はどちらか云えば、感傷的などが多分にあつたと思います」

葎「やっぱりお齡のせいですかな」

梨「そうね、もう程なく停年だから」

路「小柄だから若う見えるが、非常に忙しくて、鬘も剃らずに来た時は年だけに見えることもあるよ」

葎「男の方からも、万年青年だと云われていられますが、精神年齢も万年青年だと私は思っています。昭和二十二年の夏頃から廿七年の三月頃までは竹内と云う御本名を使って、川柳塔へ句を投句していられましたが、昭和廿七年の四月号から再びペンネームの丸尾で発表されています。最近の句には、

意地張った肩へ蛇の目をきせられる

み七日へ祭はやしが聞えて来

風鈴は師匠が吊った位置のまま

しおり戸を開けたら萩がこぼれそう

なにかをします。極く幼少の時代の言は思として、海老通の言を覚えておいて、かた

は、此人の句はいつも艶っぽいスケッチか抒情的なものが多いのです。此人から知性の句や批判的なものを探そうとしても見つかり難いのです。強いてゴツクゴツクすれば、

どの顔も嫁してしたがう娘に見えず

此辺で捨てる相手へする無心

食うためのハンドル又も人を饒き

茶立ちする程の人でもなかったが

位のところでしょうか、少し昔の句ですが「封筒も二十才の頃を捨てぬ色」などは明らかに其万年青年振りを發揮しています

手をひけば影もあまえている月夜

君とゆくブランの中の伊豆熱海

何処へゆく水かつつじの色をのせ

など何となく女性の匂いにする句だと思ふのです」

梨「句もそうですけど、好みもそうなんです。戦前だったか、何処かへ行かれた時の御土産に花瓶を頂いたのですが、それがやさしい模様で十七、八の女学生からのプレゼントみたいなですよ」(笑)

葎「あの花瓶は私も覚えてますが、あれを頂いた時はほんとに潮花さんのセックスを疑いました。それ位印象的でしたわ」(笑)

良「然し、私たちの想像以上の努力家ですね」

葎「ああ云う努力家が四、五人もよれば大概のことは成功するでしょう。もうスペースもないと思いますからこれでエンドにいたします。皆さまありがとうございました」

(葎乃筆記)

紫 香 を 語 る

― 語る人達 ―

麻生路郎・麻生葎乃・丸尾潮花・菊田いさむ

司―きょうは葎乃先生の六十五回目のお誕生日ですが、この日に黒川紫香氏を語る座談会を開くことは意義深いものがあります。恩師としての路郎先生、葎乃先生。小学校時代か

らの竹馬の友としての潮花氏。職場と趣味の後輩のいさむ氏と、役者がそろったところで、霞乃先生から幕を開けていただきますよう。

霞—そうね。(ちよっと考えて) 紫香さんは、お芝居というなら「だんまり」なんです。

ですから永いおつきあいをしていてもあまり多く語り合わないので、くわしいことは知りませんが、とにかく口数の少ない、ズバリ実直型の人ですね。

い—よい意味でいうお人好しです。職場でもうるさい仕事を頼みにゆくと、返事もせずその仕事を片付けてくださるが、別に返事をしないからといって、いやいやするのではありませんね。むっつり右門という役どころでしょうか。

潮—頼まれると嫌やと言えない気の弱いところがある。

路—そういう人に金を借りに行くんだね。(笑)

霞—無い袖は振れぬ位は言うでしょう。(笑)

い—イヤよく貸しては返えしてくれないと、コボされていることもありました。(笑)

潮—彼は非常に子煩悩である。孫もいるし今は幸福の絶頂かも知れない。

い—いつも何か考えていますね。

潮―何かことがあると涙ぐむ。やっぱり気が弱いのだな。

路―しかし、芯は強い。でなかったら会社で役をもたされたり、旬会部の責任者なんかにはなれないからね。

潮―あれでなかなかユーモリストなんですよ。

い―旅行のプランを樹てるのはうまいもんです。バス、電車、汽車、船と非常に乗物をうまく利用するので会社でも有名です。

路―旬会のプランなんかもうまいよ。

潮―その旅行プランで思い出したが、月ヶ瀬へ行った時は、時間の計り損いで真暗になってしまつて、梅が見られなかったことがあった。夜桜には雪洞（ほんぼり）が点いているが、夜梅には一本参りました。あれで日記もつけているし、キッチリ屋です。

い―愛妻家でもあるし……

路―酒もあまり飲まないから女の失敗もなく、奥様からみればいいご主人だね。潮花君のように婦人からレターもこないだろうし。

潮―先生、わたくしも愛妻家ですよ、紫香君に負けない位です。水客君も愛妻家だし、こ

の三人組はその点よう似ています。三人寄っても飲む相談はせず、ぜんざい食べようか——という甘い方です。

司——一つ少年時代の話を聞かせてください。

潮——水客君、紫香君、僕の三人は「中津第一小学校」時代からの学友でした。小学校の頃は、あまり紫香君とは遊ばなかった、というのは、その頃の彼は、僕より背が相当大きかった。大体こどものころは、ノッポとチビは遊ばなかったようです。四、五人連れの子供たちを見ても、やはり今でも背の高さが同じようなのがそろっている。

い——紫香さんは、そんなに大きかったのですか。

潮——中位いかな。僕が小さ過ぎたのでしよう。(笑)

い——いまの紫香さんは小さい方ですのにね。

潮——背が伸びずに顔だけ大きなりよってな。(笑)卒業する時、どこへ行くのかと訊ねたら、例によって何も言わなかったが、次ぎ逢った時はチャンと阪急へ勤めてました。

路——三十何年周勤続ということをこの前来たとき聞かされて驚いたよ。阪急の生字引的存在だね。

潮—十五、六才のころ同人雑誌「トンボ」を発売した、その頃からすでに文学の芽は伸びていた。ある同人が「脱走」という赤がかった作品を発表して、警察から調べにこられたり、家へ帰っても刑事が来ているように思つて、十三の河原で日がトツブリ暮れるまで頭を抱かえてビクビクしたことがあった。その後「文の雫」というのを出版しましたが、その頃から三人は川柳をやりだしたのです。早作りの練習もその頃ともにやりました。

司—趣味は文学一本ですか。

潮—水客君のお父さんと共同で劇場を経営していた父をもつ彼はよく芝居を演つたものです。水客君とは親戚で、彼のお母さんは三味線も弾くし、いわば芸道に生きる両親をもらった彼でしたから、芝居なんかなかなか堂に入ったものでした。「曾我対面」では敵き役の工藤を演つた。僕は五郎と舞鶴の二役をしました。

葭—優しい五郎ですね。

潮—「山崎街道」では紫香君の定九郎、僕の与市兵衛。

い—初演定九郎の仲蔵以来の名演でしたよね。（笑）

路―紫香、水客両君のお父さん等が経営していたという「福井座」なら僕もよく知っているよ。

潮―風葉君（故人、元不朽洞会員）が脚本を書いて全十五場という大作で、途中で時間がなくなつて、その日に片付かなかったのがあつた。芝居の出来んものは幕引きをさせられました。（笑）

い―野球も好きですね。

潮―よく他へも試合に行きましたが、僕はもっぱら記録係でスコアブックを提げてついて行つたものです。50対0で負けたことがあつたが、まるでラグビーのスコアみたいだった。あんな荒い試合にはソロバンを持って行かぬと点は何点入ったのかわからなくなる。

い―紫香さんのポジシヨンは？

潮―キャッチャーです。

司―これで、先刻、路郎先生が芯が強いと言われたことがわかりました。小西得郎張りで言うなら、コレハ、ナント申シマシヨウカ、捕手とは強肩にして強打、沈着にして果敢を

生命とするだけではなく、よく一軍の支柱として扇の要的存在でなくてはなりません。
紫香氏を知る好材料を得ましたが、次は作品に就いて。

葭——土の匂いにする句が多いそうですね、潮花さんとは対照的作家という感じがします。

菜の花の中に役場があるばかり

二三匹蛙は川へ逃げ損ね

乞食にも喰わず嫌いがあると見え

信号を待つ間に馬はよを見する

い——虫や動物の句が多いですね。

路——箕面に住んでいたこともあるだけに虫の句は確かに巧い。

い——句会で、虫の題が出ると、ああまたやられる。と、もう作句ができなくなります。

潮——虫が好かんのやな。(笑)

い——虫のなかでも蛙の句は特別にお得意のようですね。

みんな寝てしもうて母のいい月見

蟬持って客へ挨拶する子供

灯を貸して夜警も探す落し物

片っぼの下駄で蟹とり帰って来

戸をあける音さえ違う長女次女

司―ではこのあたりで幕にしたいと思います。ご多忙のところ有難うございました。

(司会・筆記・一三六)

水客を語る

―語る人達―

麻生路郎・麻生霞乃・黒川紫香・丸尾潮花・松川杜的

司―氏の雅号のせいでもないのでしょうか、月初めにこの座談会をする段取りをしたら、紫香氏が旅行中でダメ、それから二、三日したら潮花氏がかぜ引き、それがすんだらこんどは紫香氏のお子さんがハシカ。と、ことごとく水に流れたワケで、言うなれば各停で旅をするようなもどかしさでしたが、どうやらきょうは皆さんお揃いで、やっと軌道

にのったというところです。では例によって、レディ・ファウスト、蔑乃先生から発車していただきますよう。

蔑——大阪鉄道局に勤めてお忙しい人ですから、句会の日以外はあまり話あうことがないのですが、キチンと座っている時の水客さんは、矢がつたっているような感じですね。

潮——うちの女房の言うことにやですね、鶴が立っているようだと評したことがありました、が、細い矢と鶴とは、うまく表現したものです。（笑）

紫——かたちを崩さず、あのかしこまったままで、アツと言うようなシャレや冗談をトバすのですよ。

杜——そうですね、会社でもその通りです。たくまざるユーモアとも言いますが、私なんかもととき水客さんの巧いシャレに感心させられております。

紫——こどもの頃から、かたちを崩さず冗談を真面目な顔で言うてのけたり、ちょっとした手品をしてみせたりして、僕らをよく笑わせてくれたものです。

司——紫香さんと水客さんはご親類だそうで。

紫——イトコ同士なんですよ、母方のね。つまり僕の母の妹が彼の母というわけです。幼稚園はずっと一しょでした。天下茶屋の小学校一年生の時、家庭の事情で、彼は東京へ行つて、早稻田中学から早大へと進んだのですが、お父さんが亡くなられたので中退して、それからまた大阪へ帰ってきて関西大学の夜間部を出たのです。彼が東京にいる頃こちらで潮花君らと「トンボ」という同人雑誌を発刊したのですが水客君は「秋羊」というペネでよく寄稿してくれましたので、この三人の友情は、西と東に別れてもきれることなく、今日までつながれてきたわけです。

司——川柳はどなたが先輩なんですか。

紫——水客君が、大鉄の「畔柳社」で故福田山雨楼氏に指導されていたので、君もやれよとすすめられたのが、そもその病みつきなんです。（笑）

潮——僕は紫香君から、君もやれよとすすめられた。（笑）

杜——旅行は好きですね。

紫——その頃から鈍足会という趣味の旅行のメンバーでした。

潮——僕は早や足やったぜ、君やろ鈍足は？（笑）

紫―水客君は相撲も好きですな、いまは若乃花に熱を上げています。芝居も好きです、こ
とに歌舞伎は亡母の在世中替るたびに連れてゆくという親孝行ぶりでしたね。芝居の話
が出たので、また福井座が登場しますが、福井座の経営は私の父がやっていました、
資金のほうは水客君のお祖父さん（正石紙間屋）が出していたのです。そうですね明治
三十七、八年というから、日露戦争のころですね。明治天皇と日露大戦争というところ
かな。（笑）

葭―福井座なら私も知っていますよ。

路―福井座は福井茂兵衛が立籠っていた小屋だった。曾根崎新地を東西に流れていた蜷川
に南北にかかっていた桜橋のすぐ西で北側だったと覚えている。蜷川が埋め立てられて
今では桜橋と言っても橋はないし地名として残っているにすぎない。私が大阪へ来たの
は明治三十一年だから随分昔の話だ。

紫―私の父が経営していた頃の座付の役者に嵐璃徳や佳笑がいました。曾我廼家五郎が中
村三之助といい、十郎が時代といってウマの足をやっていた頃ですから古い話です。それ
から水客君は、新国劇の辰巳の国定忠治の声色が上手です。

司―瑠徳って、帝キネにいたあのですか？ 百々之助の十七、八のころですね。

紫―その瑠徳の養女というのが、私の姉なんです。

杜―同じ大鉄にいる関係で私は水客さんに川柳を手引していただきましたが、さすがに川柳のひき出しみたような人だといわれるだけに、あの人の早い作句ぶりにはいつも感心させられます。句会案内の葉書に、それはそれは小さい文字で、キチンとあの人独得の右下りの字で句を書きとめて、これまたキチンと二つに折って、服のポケットにしまっておられます。

潮―キッチリ屋といえ、水客君は時間のことなんか正確やなア。

司―国鉄時間は世界的ですからね。(笑)

潮―食事はおそいな、川柳は早いけど。(笑)

杜―よく噛んで食べるからでしょう、甘いものが好きなんですから、歯がわるいのです。う。それからあの人の電話は長いです、というのは、さっきも話が出ましたが、何んでもキッチリするからでしょうね。つまり本職の統計がそうさせるのでしょうか。こと統計にかけては大鉄きつてのベテランです。

司—そうキツチリやられると、奥様のへそくりがやり難いでしょうね。

紫—そこは愛妻家ですからうまくヤラレていますよ。(笑)「椿の君」の話でしょうか。

潮—怒りよるぜ。

紫—やめとか。

司—そんな思わせぶりな言いかたをせずせと聞かせてほしいですな。

紫—別にそういう大事件でもないのですが、三人が箕面にいた頃、行きつけのタバコ店にそれはそれはカレンな娘さんがいましたね、その娘さんを「椿の君」とよんで、水客君が淡い思慕の情をよせていたのです。

司—水客さんはタバコをよく吸ったでしょう、その頃は。

紫—ところが水客君はタバコをよう吸わんで、吸うのは僕で買いにゆくのは水客君だったのです。(笑)

潮—結局タバコを買いに行つてロクに話もようせんと、たったそれっきりの話でこの純情物語は終いや。(笑)

蔑—そんなことなら誰もが一度は味わったことでしょうに。

潮―感傷的な句を作っても本人は少しも感傷的になっていないようだ。

菫―同じ旅の駅を詠んでも、豆秋さんなら犬が出てくるとかしてユーモラスに表現されるが、水客さんは俳人に近い感覚で川柳にまとめるところでしょう。

路―しかし、それが俳句にならずに、立派に叙情詩としての川柳になるんだからな。まあ異色作家の一人だと云えるだろう。

潮―旅するのに公用私用を問わず日本全土ロハで行けるのはうらやましい。停年になるまでに今のうちにウンと旅をしておくことだな。

杜―やめても十五年間は無賃バスがものをいいますから、水客さんの川柳行脚はまだここ二十年位は大丈夫続きますよ。

司―話題をチョットもどしていただいて、ご家庭は子供さんが何人ですか。

紫―男女五人という、ちょうどいいところです。上が二十才ですか。ついでに申しますが、水客君の奥様の妹さんというのは、やはり川柳人の辻白溪子氏の奥様なんです。

路―そうかな。そりやあ初耳だ。

司―どうやらスペースもなくなってきましたので、皆さんから水客さんの句を出していた

だきましよう。

潮——川村好郎氏が、水客ファンで、水客君の句は全部まとめてあるそうだ。句集でも出すときは好郎氏のもとへゆけば、たちどころに句集が編めるというわけで、まったく美しい話だと思います。

路——とにかく、水客君の句は旅の句に於いて特にすぐれている。これは仕事の関係上、よく出張するので、自然に親しむ機会が多いからであらう。そして非常に静かに自然に触れていることも特徴だと云えよう。水客、紫香、潮花と云えば幼稚園時代からのおきな友達で、二十幾年間、一しよに川柳をやつて来て川雑の三羽鳥と云われているが、こうしたことは川柳界にも稀に見る珍らしい存在だと云えよう。

ひっそりと蛭生きてる音をたて

竹の皮冬の音して踏まれたり

松茸が届いて何も言うて来ず

いちにち中時計が鳴ったのを知らず

月横に動くと見れば汽車曲る

お休みなさいと云うて女中の顔になり

足袋少しきつく女は旅に出る

阿蘇山にて

草千里霧は重たき色となり

司―どうやら終着駅にきたようです。お疲れのところいろいろ好資料を提出していただきましてありがとうございます。

(司会・筆記・一三夫)

箸

箱

—— 正本水客作品

正本水客

子 沢 山 使 い に や っ た の を 忘 れ

桐 炭 の 灰 そ の ま ま に 人 が 来 ず

電 柱 の 蔭 か ら 末 の 子 が の ぞ き

植木鉢もてば幸福そうに見え

夫婦して同んなじことで子を叱り

千竿のいちばん上に僕のもの

箸箱

正本水客

妻の手の荒れいとおしむお元日

おいしいと言わない人と妻さとする

一番で帰れば洗濯してる妻

遮断機に向うは苅持った妻

けんかして居ても靴だけ磨いとき

信用のできる屑屋と妻がいう

二三日さで喋ってきた機嫌

箸箱

正本水客

洗濯のぬれ手で蜜柑ひとつ呉れ

ゴムバンドはめたままなる妻の手よ

お祝いの墨する横へ妻もくる

貧乏のよさを女房も悟ってき

怒　　つ　　て　　る　　肩　　を　　ト　　ン　　ト　　ン　　叩　　き　　に　　き

子　　の　　き　　げ　　ん　　父　　の　　枕　　で　　寝　　て　　し　　ま　　い

す　　ね　　た　　子　　の　　茶　　碗　　が　　伏　　せ　　た　　ま　　ま　　に　　あ　　り

母　　娘　　し　　て　　ほ　　ち　　ほ　　ち　　し　　と　　く　　大　　掃　　除

箸
箱

正本水客

ふつつかな娘に二人して育て

子を寝かす言葉になつて炭をつぐ

夜話の楽しさ餅のかびをとり

茶がうまい朝の疲れを齡という

障子張り替えて朝から坐ってみ

たらしいの裏は僕が生れた年月日

土性骨親の子供と言わしとき

中坐する理由に子供連れてゆく

箸箱

正 本 水 客

丸刈の頭が蚊帳に引っかかり

洗濯の半の下へ鶏がくる

きたないものに脱いだ靴下

式服を借りにきたとて小半日

父の死

肉親といいえぬ彌陀の眉となり

母を憶う

母のいない三疊開けてまた閉める

母の通した糸そのままに針坊主

風
う
ご
く

屋上の埃りも春という軽さ

心の奥へポツンポツンと雨が洩り

近づけば山羊はゆっくり道をあけ

風うごく

正 本 水 客

何を焼く煙りか旅を春にする

新緑の深さに舟を流してき

ブラックで飲むコーヒーは風を聞き

寒むがりの姿で柿の実が残り

水へ散る落葉は水の色になり

大川の水にのってく牡丹雪

風うごく

正本水客

釣鐘の下をしばらく蝶去らず

宇宙の広さへくつわ虫が鳴いて

握りしめれば砂のかそけき反抗よ

散髪の鏡のなかも春になり

赤電話 視線の端を雲がゆく

牧場の門から夏がのぞいてる

分教場みどりのリズムに包まれて

風うごく

正本水客

あべの橋 汽車の煙りも春になり

ロープウェイ 花散る風を見て渡り

隠れ住んで 笥の水も春になり

二三 発 宵の花火は雨になり

池 浅く 空の 高さを うつつ さない

会 議 室 おち 葉 終 日 散 り つ づ け

冬 の 滝 ひ ま な 男 と 見 ら れ た り

陳 列 の コ ッ プ の 水 に 冬 う つ る

風 う ご く

正本水客

水を汲む径が峠へ別につき

月の出を無口な人に教えられ

雨脚の海が静かな大広間

暮れきって渡しの波も見えずなり

悲しいものに見れば悲しい橋の水

裏町も水が流れて京に住む

鮎美さんに

椿落ちてもそのまま赤い色であれ

風うごく

正 本 水 客

露の
みち
蟹の
親子の
通る
徑

逆光の
なかを
家鴨が
帰って
き

道は
故郷へ
つづく
枯木の
ざわめ
き

ひ
そ
り
の
眼

正本水客

石 投 げ る 楽 し さ 都 会 の 子 は 知 ら ず

頼 り に し て ま っ せ と 冗 談 め か し と き

片 親 に 逆 う て み て 淋 し が り

親 を 悪 く 言 う 人 の 顔 み て い た り

傘さして酔うているのが分つてき

お互いの小さな欲を笑いあい

玄関までは納得をして帰り

古書積んで襖を開けるとこを決め

ひとりの眼

正本水客

お返事を待つてゐるうちに春になり

せめてもの反抗 坐りかえ坐りかえ

せめて医者へほとこのしり心済む

胸いたむ話へ窓を開けに立ち

人間が變つたように花を植え

死にやはつた人を濟まない例にする

きき耳をたてて老後を淋しがり

火鉢にも手が出ぬほどに氣が減入り

ひとりの眼

正 本 水 客

耳 打 ち の 膝 へ こ ぼ れ る 酒 も よ し

運 の な い 男 の 膝 の 握 り 飯

人 生 へ 意 地 張 っ て い た 頃 が よ し

都 会 人 ど う か な る 気 の 顔 を 持 ち

ラ ッ シ ュ に は ラ ッ シ ュ の 顔 を 持 っ て い る

シ
ョ
ー
ウ
イ
ン
ド
貧
乏
く
さ
い
顔
う
つ
る

雪
空
へ
自
分
の
咳
が
す
い
こ
ま
れ

哀
愁
の
限
り
を
線
路
の
び
て
い
る

高
架
線
み
な
仕
合
せ
な
街
に
見
え

か
げ
口
の
通
り
と
思
う
日
も
あ
っ
て

ひとりの眼

正 本 木 客

金包む手許に視線感じてい

灰皿へむく林檎とはあわれなり

阿呆の一つ覚えのようにパチンコ屋並ぶ

かんと煮き脊中の風は気にならず

咳払いして交番を通り越し

不渡りを透かしてみても始まらず

胸算用していた声で返事する

実力でこいとは無駄なせりふなり

だんじりへ此処で生れた人の顔

達者なうちに رفتかなあと出好きなり

ひとりの眼

正本水客

山下清展にて

青赤あお性の匂いのない根気

戦時

日本語ああ君が代は海を越え

車掌さんのモンペパチパチ楽しそう

男さかしく風呂敷を持ち歩き

入門 初期

新婚を訪えば二階に通される

全快の走ってみせて叱られる

淡雪へ傘の匂いが新らしい

ひとりの眼

女

な

る

一人きりにしといてとは女

くちづけで不安な言葉ふさいどく

調和ということが娘にのみこめず

良縁と言われて女気にいらず

女
な
る

正本水客

歩巾あわして悲しみを見せまいとする

三十を過ぎて素直に嫁にゆき

電話口おんなぐるつと向きを変え

大阪弁まる出しにして女老け

商売々々と女腰を上げ

女よよと泣いている間の手持ちぶさた

西瓜の種落ちて情痴の部屋となり

淋しいという口癖を覚えられ

女なる

正 本 水 客

ピンポンが上手 女中をやめて嫁き

アルバムを次々出して打ちとける

エプロンのままの家出は たかが知れ

他人さんの奥さんだから褒めておく

脊丈けなど較べて妓かえらない

死顔のことも気にして女老け

粉ミルク別れた妻の匂いする

耳搔きも仕舞うて本気に腹を立て

女
な
る

正本木客

妹とおもて欲しいという返事

もの好きな私でしよと会いにくる

レジスタンスの一つ口紅つよく引く

あきらめて呉れとは女うぬぼれて

情熱に負けそうになり炭をつぐ

手を振って別れることに女馴れ

親切がそろそろ恐くなり始め

爪切ってあげて付添い別れる日

看護婦の浴衣ゆっくり叩頭する

女
な
る

正本水客

パ
ト
ロ
ン
に
叱
ら
れ
ち
ゃ
っ
た
舌
を
出
し

本
当
の
気
持
が
言
え
ぬ
遠
花
火

高
島
田
う
つ
む
く
も
の
に
出
来
て
お
り

あ
ん
た
さ
ん
は
甘
党
だ
か
ら
別
に
さ
れ

影
法
師

正本水客

他人さんのための乾盃ばかりして

煽風機かけっぱなしで部屋にいます

坐るべきところへ丹前でも坐り

お喜びに行けば夫婦で坐って居

近代人氣質 花の匂いをすぐに嗅ぎ

金屏風しまうに離れから呼ばれ

行水の音でしばらく待たしとき

お見舞いにきて見舞など言わず去に

影法師

正本水客

水道の横から蟹が顔を出し

出双包丁らしくポタポタ水が垂れ

拾田のお釣り暫く待たしとき

鏡屋の鏡あちこち灯がともり

銀行の前で正月なにか売り

真直ぐに白衣の前を通り過ぎ

寄付帳へ書いたまんまに急逝し

壁のかわかぬ部屋へ通してもろて飲み

影法師

正本水客

自転車で産婆は月をみて帰り

自転車を押して世話好き歩を揃え

自転車の後ろへ栗の枝をつけ

口止めをしに二三間戻ってき

寝転んだ足許で将棋さしている

別室へはこぶコップの音させて

水道の水でとにかく水枕

ふところ手万策つきたとは見えず

影法師

正本水客

人を呼ぶ声で舞台は明くなり

芝居の門 別れが済めば片着ける

世話役は脊広の襟へ珠数をかけ

動くもの皆んな動いてホームラン

旅
か
ら

正本水客

旅ひとり心の底まで雨にぬらして

手洗いに蟹がいるのも旅のこと

阪急が見えて旅から帰ってき

早春の峠 両手はポケットに

旅帰り 子供の寝息がそばにあり

また後で きますと 女中話し好き

ものなれた 速さで バスを 蟹が逃げ

旅から

正本水客

大和路

薬師三尊そとは明るい秋の雲

塔九輪水煙天に詩を奏ず

赤膚焼やまとの雲の湧くところ

うねび山いただき近く若葉する

大和路は歴史が澱むように暮れ

旅から

正本木客

山の湯の涼しさ葉書ひとつ書き

ベランダの対話しあわせそうに見える

お互いの子をほめ合うて旅にいる

宿帳へしみじみ生きてきた夫婦

ロビーから見ればきれいな浜に見える

山吹がこぼれて茶室 人が住み

境内の裏へまわれれば海が見え

絵葉書の通り渡月橋春になり

旅から

正本木客

お風呂こたつお風呂こたつと旅終る

ひとりきて祭り気分にとけあわず

朝飯へ一本欲しい顔ならぶ

修学旅行きつちり畳む二三人

旅の下駄灯のある方へ歩いてみ

満ち汐の音 島へゆく船が着き

見送ったふんいきのまま喫茶にい

旅馴れて担ぎ屋の愚痴聞いてやり

旅から

正本水客

物産館 大きな鍵で売ってくれ

旅らしい音で柳に傘がふれ

花時はよろしおまっせと歩かされ

紅葉まだ早く写真屋一人いる

ケイブルの灯が点々と旅暮れる

旅馴れぬ一人が起きて虫を聞き

二月堂 奈良は霞んでいてよろし

淡路島 漁船の音が近くなり

旅
か
ら

正本水客

京都

高台寺 萩なつかしむ人と佇つ

大原にて

三千院 桜のなかに鐘が鳴り

長良川にて

総がらみ 篝火ばかり眼に残り

梓川 信濃にて
焼岳 穂高
陽に競う

岩 抜いて走る水なり
岩魚すむ

蟹の味 冬の山陰
旅もひとりの箸枕

旅から

正木水客

秋という汽車の煙りが透いてみえ

月が出た夜道 芒の穂がそろい

旅なれば釣瓶の松葉すてずおく

見下せば熱海 自動車の灯が続くよ続く

親鳥子鳥

— 黒川紫香作品

黒川紫香

戸を開ける音さえ違う長女次女

喧嘩また喧嘩で年子育って来

朝顔のどこまで妻に見送られ

賑やかに戻って女房芋をくれ

合オーバ妻に預けて花を折り

ギッスなんてと女房お可笑がり

親鳥子鳥

黒川紫香

馬鹿正直を女房少し怒って見

ジネマでも見よかと夫の方が折れ

二時間後子供は逆になつて寝る

一家みな坊主枕をはずして寝

寝つかれぬまま子供の頬をつき

子の寝息夫婦あんなころ喰うとする

子を一人女風呂から届けられ

親鳥子鳥

黒川紫香

プ
ラ
ン
コ
を
一
押
し
押
し
て
煙
草
に
し

親
の
靴
子
の
靴
ち
が
う
と
こ
が
へ
り

子
が
帰
る
音
で
小
言
を
や
め
に
す
る

一 電 車 ず つ に 勤 め の 子 が 帰 り

留 守 番 は や っ ぱ り 母 が し て く れ る

娘 の 家 へ 来 て も 母 親 忙 し そ う

親 鳥 子 鳥

黒川紫香

妻の死に逢う

父と子の暮しへひよこ一つ飼ひ

家計簿が二月で切れた淋しさよ

雨の駅妻が迎えに来てそうな

分担をきめて父と子の暮し

通学と通勤遺骨だけ残し

間違えて母親呼んだ子のえくぼ

星空へふと先妻をしのびに出

親鳥子鳥

黒川紫香

再婚

子に氣兼ねして後添いと出る日なり

母親がちがいつづくるものが出来

娘を嫁に出す

娘が一人減った火鉢をつついて見

いのちあるもの

黒川紫香

風のある方へかんだひよこ売り

にわとりが二羽郵便屋に追われて来

滝しぶき糸切り虫もぬれている

葉の蔭でみの虫涼しそうに揺れ

足折ってしもて蝗にふびんが出

貸ボート尺取虫が端にいる

いのちあるもの

黒川紫香

蝶々へ先頭少し立止り

ステツキで来ればカマキリ見構える

伝説を聞く樟で蟬が鳴き

騒がしに来たよう蟬はついと逃げ

番号をつけデデン虫を庭へ捨て

子供等は蛙の腹をうれしがり

笹の葉の風へめだかがつきまとい

金魚もう動かず冬の覚悟する

蛤の舌つかむべく腐心する

いのちあるもの

黒川紫香

待たせてる客に子猫はからかわれ

もう一人待つ座布団に猫ねむる

停電へ猫思いきり踏まれたり

リヤーカーに積める世帯に犬もいる

こわがりな犬こわがりな人に逢い

吠えもせず夜道を犬がついてくる

いのちあるもの

黒川紫香

豆の花柵出る牛の鼻をなで

踏切で待つ間に馬は他見する

象の鼻まず日本のごみを吸い

ふとキリン遠くの方をふりかえり

旅
ご
ろ
も

黒川紫香

一人旅一本きりの酒に酔い

ふと旅館誰かが起きた音になり

旅先へ来てから女よくしゃべり

目薬も持って女は旅に出る

梅干の種早立ちの皿にのり

名月へこれが旅愁と云うものか

また名所同んなじところを写される

旅ごろも

黒川紫香

ポ ン 中 の 島
ポ ン 船 恋 を 見 て 行 く 中 の 島

京 都 京 都 (二句)
へ は 降 り ず 八 つ 橋 一 つ 買 い

甘 酒 で 昔 語 り を す る も 京

鐘 一 つ 長 谷
に ほ た ん く ず れ か け

鐘 の 音 高 野 山
冷 え 冷 え と し て こ だ ま す る

い き な り 洲 木
に 蛸 手 づ か み で 突 き 出 さ れ

月 牙 鳥 羽
え た ま ん ま 鳥 羽 湾 寝 た 様 子

旅 ご ろ も

黒川紫香

開城を心に秘めて松ゆらぐ

山の湯の影は静かな水の音

一の湯で先ずぬぎ捨てる宿の下駄

ゆで玉子湯気を囲んで丹前着

湯煙　　玉造温泉
　　りの中で新婚らしい影

もう誰か朝を漕いでる柴山湖
　　片山津

行列が来そう、東海道に松
　　浜松

酔いさます伊東浴衣とつきあたり
　　伊東

旅ごろも

黒川紫香

雲海平湯峠の切れ目に白山碧く浮く

浴衣着て出れば平湯は山の底平湯温泉

河童橋上高地（二河）カメラを向けて立つ若さ

見上れば前穂かぶさるように立ち

すがた

黒川紫香

女難とは易者うれしい事を云う

人妻ときれいな話して別れ

惚れている話を女笑ったとき

毒づいているのも惚れているからさ

手廻いで恋の便りが書かれたり

悪だくみ女の智恵がふと怖し

惚れられる顔とはさらさら思わねど

すがた

黒川紫香

仲人の夫人が一番美しい

小遣いを呉れるに姉は隅へ寄り

同伴の女の方が悪びれず

窓際へ来れば娘は唄になり

こんなにやくをベラベラさせて又喋り

父うちゃんが来た来たと言ふ二号の子

朱亡人遊び相手がまた変り

重役をほろくそに云う姉芸者

丸帯をほどいたところへうどんが来

段梯子の途中で客の名を聞く妓

すがた

黒川紫香

くっしゃみで起きて二号の恙がなし

保険屋の根気女とあなどれず

犬抱いて勧誘員を煙にまき

長袖を着れば矢つぱり女の子

ええしの子今度は舞をやりはじめ

新婚を訪えば二人で迎えに出

妻に買う土産で友を待たせとき

妻君も出る気機嫌で送り出し

幕合いに来る挨拶は妻を連れ

縁側へ立てば体操してる父

すがた

黒川紫香

押売りへみんながのぞく子沢山

叱られている子へ外から誘いに来

戸口調査の巡査も笑う子沢山

子と鳩の歩調が合うた影となり

一人づつ子の年を聞くお正月

何んやかや云うてて子供こさえて居

長男は父よりでかい靴をはき

小器用に生れ女房も持たずいる

臨終へ女中も隅へ泣きに来る

臨終の顔へ無心な蠅一つ

すがた

黒川紫香

子ほんのう同士動物園で逢い

子を連れた同士ラムネを立飲みし

同僚の見舞手ぶらで来てうれし

姉ちゃんと呼ばせて罪の子を育て

また夫職を変えてる共稼ぎ

山 か げ の 村

黒川 紫 香

ほとほとと冬の笥は淋しいね

野菊にも風は無情なものとなり

煙草スパスパ稲の風を見てるなり

托児所の屋寝きれいな陽があたり

石段で撮れば四、五人並びに来

先祖みな眠り給いし石に苔

もう虫が鳴くよと浴衣で冷奴

螢籠持たされに来る女の子

山かげの村

黒川紫香

抜け道のこんな所にうまい水

電柱がつづいて隣の村となり

山の池ポツンと釣っているもよし

水筒の中で茶柱立っている

稲刈りへ声をかけかけ来る役場

田植する徑へ遺骨の列つづく

見晴しの峠ここから風変る

ねぎ坊主道問う人もちとかがみ

山かげの村

黒川紫香

粉な雪が障子の穴を抜けて来た

へんこつで通りやいとがうまいなり

屋根瓦落ちそなとこで柿が熟れ

扇パチパチ和尚の丸い膝

とりあげて帰る産婆の肩に月

焚火の火軍手に湯気の立つ寒さ

坂ばかりあつて別荘地と言われ

倒産を知らず今年も柿がなり

自転車を押し押し話す儲け口

踏切の日傘は後をむいて立ち

山かげの村

黒川紫香

釣竿で落した下駄をかき寄せる

二三服渡舟で売れる薬売り

船頭の惚気海には波もなし

船世帯みんな裸の昼の飯

わ
だ
ち

黒川紫香

お隣りの夜逃げ感心してるなり

ふと香具師に名指しをされた懷手

さて布団折り折り職を頼んどき

もめ事へ着流しで来て直ぐまとめ

餅搗きの横をお医者を通り抜け

玄関で戻るつもの友をつれ

つつましく住んで表札名刺なり

わ
だ
ち

黒川紫香

ちんぴらが先ず来て香具師の荷が解かれ

口笛であてのなのが二人行き

表札をのぞいたらしい音で去に

靴の泥残して押売り帰るなり

屋上で見れば電車も面白し

物干の上でこの家借るときめ

物干で雪がとけない植木鉢

蜘蛛の巣をつけて鋸貸してくれ

半分になってポスター扉にゆれ

石垣へ並んで憩う東西屋

わ
だ
ち

黒川紫香

つぎつぎに長屋で一べつされて抜け

消えそうな灯影で八卦見てもらい

だし抜けにおっさんと呼ぶ靴磨

請求書チップをのせて返される

番頭の小言は算盤立てて言い

耳元で話すは小さい金の事

エンマ帳芸者になろた唄も書き

しるこ屋の湯呑みへ紅をつけて去に

借金のため廻しで年をとり

下戸は下戸上戸は上戸の辻を折れ

わ
だ
ち

黒川紫香

盲判直立不動を見上られ

先客の聲は去にそな声ばかり

いかけ屋へ立つ子の一人わるさそう

御機嫌さん言うて保険の名刺くれ

社長室汚職を知らぬ花が咲き

資本家のはしくれと言う課長なり

スト・済んで社長いつもの顔になり

これだけで食えと辞令渡される

わ
だ
ち

黒川紫香

給仕また使用を頼む声と知り

一算へ二人並んだ女事務

君ではないがと矢っ張り怒られる

辞めたのが会社へ何か売りに来る

髭おいて失業保険貰いに来

世渡りを教えてもらうコップ酒

通勤の隣も門を開ける音

黙否権刑事の煙草吸うている

先手打つあご紐かけているボリス

特ダネへ記者はそこらにもう居らず

わ
だ
ち

黒川紫香

雑談の中へ名刺が一つ来る

受付もうまいと思ひ走り書

風邪薬のんで一算また合わせ

和服着て辞める挨拶して廻り

女事務休んで花がしおれかけ

と
じ
紐

黒川紫香

同期生飲もか飲もかとやって来る

一円の釣りを走って来て渡し

何不自由なのに易を見て貰い

質置いて素うどん喰べて帰るなり

ふところ手してれば家を尋ねられ

三人が三人寝て盗られてる

乗り越しを降して尾灯ゆれて行き

と
じ
紐

黒川紫香

松の葉がこぼれ年始の客が去に

二階から抜け毛を落す春日和

鉢巻をしたのが這入る仕舞風呂

長椅子へ暇あり過ぎる身を預け

寄附帳に蠅蚊べちゃこう死んでいる

如才なく子猫ももろて帰るなり
サラリーを持って見舞に来てくれる

養子もう一人跡継ぎこさえたり

朗かな養子養子を口に出し

来客を止め台所音をさせ

と
じ
紐

黒川紫香

上着みな脱いで炭坑節になり

十八番出すだけ出して寝てしま

お帳場で幹事ぶぶづけしてるな

死刑囚のでんぼへ薬つけてや

親分はおっちょこちょいを一人連

盗人も落目の家と見て帰り

退職金あての借金ばかり出来

停年に近く北海道へ行くプラン

あきらめのつかぬ注射をまた頼み

急変を見舞う傘立て横にこけ

と
じ
紐

黒川紫香

弟に辞書を譲って学徒立つ

門出ふと筈の掃き目見つけたり

其の門出家へ敬礼して出かけ

丸刈りの中に玉砂利踏んで来る

軍事便糸肩つけて母が受け

達者達者と唯それだけの軍事便

自衛隊歩調揃えて遊びに出

二三辺叩いて木魚のむきを変え

極楽へ行く気お経を習いかけ

と
じ
紐

黒川紫香

代僧が来て戒名を讀み違え

臨終へ藥淋しく残るなり

粉な雪を顔でよけてる懷手

魚屋と八百屋初発の音になり

太平洋太陽も出る月も出る

白
い
焰

—
丸
尾
潮
花
作
品

丸尾潮花

そ
っ
ち
か
ら
来
ね
ば
出
か
け
る
帯
を
し
め

送
ら
れ
る
傘
は
ナ
ン
バ
の
灯
で
別
れ

星
あ
か
り
さ
え
も
気
に
な
る
ひ
と
を
連
れ

逢うてからたった一日たっただけ

呼び出して逢うて泣かせただけのひと

右向けば左のひとの氣にいらず

君もまた月へたたずむひとになり

白い焰

丸尾潮花

帰す気になつて玄關の灯をともし

惚れ切つて嵯峨や富士子に見えるひと

奥さんに知れたらうちが死んだげる

ひとさまの女と歩く星あかり

妻ふつとお園のようなことを言う

送る気の女肩かけ取りに立ち

追い詰めて袂でぶっただけのひと

首尾をした逢瀬ネオンのともるまで

泣いている膝へハンカチほってやり

肩先を打たれ見とれてたのに気付き

白い
焔

丸尾潮花

愛情にそむけばきつい風あたり

妾宅の雨は帰さぬ音で降り

君とゆくプランのなかの伊豆熱海

北風へたと待たせた詫びを言い

手をひけば影もあまえている月夜

大阪の恋を銀座でおさえられ

添いとげてからは冷たい人になり

断ち鋏惚れた男の爪も切り

雨ばかり見てて見送りがえらない

うたがえば愛も悲しいものになり

白い焰

丸尾潮花

人妻の恋はむしように逢いたがり

泊る気になつて女は喋らない

家柄が何であらうともう嫁く気

月にいて月を忘れていたふたり

ひ

と

り

丸尾潮花

気違いの真似さえしたい日がつづく

バーの雨泣かせてくれるひとにも来ず

ローソクの灯もよし物を思う身に

年あらた心の旅がまたつづく

大阪は夢の捨て場もないところ

博愛を衆に及ぼす金もなく

啄木を読む灯静かな雪が降り

一葉にもなれずストリップにもなれず

ひとり

丸尾潮花

泣けるだけ泣けたら明日がひらけそう

シペリヤの人を待ってて歳をとり

恋も無くろけつ染の手を洗い

両の手をつけば卑屈な吾が姿

叱られた娘の当てもない歩み

愛情の値ぶみされてるのが口惜し

まだ逢えることを信じて嫁かずいる

しつかりとハンドバッグを抱いてこけ

仕合せな膝で琴爪もてあそび

ひとり

丸尾潮花

和服着て立てばあんたも二十一

テキサスが好きな女の子に困り

下積の愚痴だ考えるのはよそう

人形の寂しさまばたきひとつせず

花

櫛

丸尾潮花

停電のなかで長唄弾き終り

惚れ切きって藤十郎になれぬ恋

御最負へ舞台化粧のままで逢い

絵のように舞妓は宵の座にはべり

清元を地でゆく恋がしてみたく

芸道のはげしさ言わず羨やまれ

食満さんに嫁ぎどなたを見返す気

近松の筆は死なねば添えぬ恋

花
櫛

丸尾潮花

帯解けば舞台の汗がこぼれ落ち

うたた寝の顔へ広げた舞い扇

先斗町舞妓の襟も秋になり

清元「夕立」に出演して（二句）

花櫛のふるえる恋のしぐさする

切れてから三味抱くだけの膝になり

泣かされて来たとは言わぬ眉を描き

弟子と言う哀れは日傘持たされて

膝で泣く涙は金のかかるもの

楽屋出て男にかえる靴を履き

花
櫛

丸尾潮花

楽屋騒然うちの帶揚げどこえいた

京だらり清水さまも雪になり

名取りぼつぼつ独身主義がいやになり

謡曲になつて芸者は撥を置き

忘

却

丸尾潮花

もう酒の力を借りぬひとになり

裏切つて来たとは言わぬ嫁が来る

許されぬひとをいつまで抱いて病む

子を抱いていても昔のひとを恋い

獄中で書けば日記も金になり

躰糸別れた妻が縫うたまま

にやにやとしてたら恋をとられてた

不義の子の処置は女の方がつけ

忘
却

丸尾潮花

落ちぶれて骨を埋めにまい戻り

雨の日の思い出ばかり残すひと

寝ころんで死んでゆく日を話し合い

嫁つた娘が残りの夢を書いて来た

形身とも思う指輪を手放す日

裏切つて金の音する家に住み

罪の子を育てる乳がありあまり

忘
却

家庭

表札もかけてひと先ず落ちつく気

見合から戻り手袋叩きつけ

家
庭

丸尾潮花

追善の名でささやかな寄附をする

腐らせて捨てる生活を羨まれ

小姑のシャアシャアとしてまだ嫁かず

秋の雨おむつの下で寝かされる

盗みしてまでも捨てられまいとする

もう泡のたたぬビールを飲んで寝る

きつちりと片づけて去ぬ女連れ

向き合うて気分の出ない顔と飲み

みおつくしうちには父も母もなし

家
庭

丸尾潮花

どの顔も嫁してしたかう娘に見えず

帰還して今度は妻の捕虜になり

美粧院義理の親娘と言う若さ

金借りに来たを女中も知っている

嫁しづいて男ばかりの家に住み

噂 自殺 処女の悩みの美しく

ひと叱ることのみつづく夜がさみし

家 庭

丸尾潮花

誰に振る旗か背中の子に持たせ

新婚の間ふたりで三味も弾き

風呂敷で嫁ぎ貞女のなかにいる

口笛で男世帯のめしが出来

振袖の似合う男の子に育ち

妻の肩もめば自分がおかしくて

事務服を脱げば二尺からある袂

母の手で育って母へ楯をつき

父ちゃんの髭シベリヤからの髭

家庭

丸尾潮花

母さんに言えば予算がありません

着ぶくれているいたら病人かと言われ

恐しや子供も金のことを言う

姑の愚痴にも馴れて子が育ち

金溜めて三面記事を寒う見る

ロボットのように奥様あつかわれ

白髪さえ染めない母になつていた

妻浴びるころ行水に月があり

家
庭

さ

く

ろ

し
お
り
戸
を
開
け
た
ら
萩
が
こ
ぼ
れ
そ
う

秋
祭
り
恋
へ
ザ
ク
ロ
の
実
が
赤
い

ざ
く
ろ

丸尾潮花

月の出を芦のあいから見て夜釣り

雑草へ螢の夢が美しい

下戸草にころべば故郷の山が浮く

月見草 墓参の道をせもうする

日
本
間
の
鋏
は
花
を
切
っ
た
音

ざ
く
ろ

丸尾潮花

百合活けてユリの匂いのなかのひと

張り替えた障子へ柿の実があかい

一房のブドウの如く長女いる

温室で育って世間こわがらず

手の花を捨てんとすれば花粉散る

捨てられた大根春の花をつけ

ざくろ

かき船

風鈴を団扇の先で鳴らして見

かき船の三味すり抜ける貸ボート

かき船

丸尾潮花

紅をとく皿も京都のものらしく

牡蠣船の障子もあかず冬の底

鏡かけ淋しや秋の陽に焼けて

君の瞳と僕のひとみのなかの雲

雑巾の雫も秋の水がたれ

河豚ちりへ雪が散り込む窓をあけ

二等車の窓二等車の風が吹き

風に散るピラもせわしい十二月

セツトして春の響きを聞いている

かき船

丸尾潮花

ビール一本河鹿の声が聞えます

聞われたマツチだ風よさからうな

どこへ行く船か港の霧を出て

麦の穂の上からのぞく淡路島

流

れ

丸尾潮花

風鈴は師匠が吊ったままの位置

皮切りにやれと扇を握らされ

けいこ屋の猫つぎ次に膝を替え

気の抜けたビールに酔える男にて

喰うためのハンドルまたも人を轢き

要求をしたボーナスで首が飛び

駅の灯に立てば高飛びしとうなり

流れ

丸尾潮花

仲居もう帰すつもりの馬鹿さわぎ

外は雨男を泊める床を敷き

造船屋さんかと娘やる気なり

どぶねずみお前も俺も生きてゐる

貞操を捨てたらこわいものがないし

流れ

丸尾潮花

く
し
ゃ
み
し
た
よ
う
な
顔
で
も
且
那
は
ん

口
説
く
気
が
ギ
ブ
ス
に
触
れ
て
ギ
ヨ
ッ
と
す
る

燃
え
そ
う
な
羽
織
で
来
て
る
見
合
の
娘

銀行のマッチで女つけてくれ

長屋悲しや姉も妹も嫁かず産む

殺されに行くハンドルと知らずもち

金の要る話へ一人いなくなり

流れ

丸尾潮花

バ
ラ
バ
ラ
に
出
来
た
ら
し
た
い
ひ
と
を
持
ち

肩
先
の
情
を
男
は
見
逃
さ
ず

風呂敷で女気輕に住みかえる

あと味の悪い脱線してしまい

金で済む恋は婦人科儲けさせ

犯されに行くとは知らぬ化粧して

流れ

丸尾潮花

パ
ト
ロ
ン
が
変
れ
ば
趣
味
も
又
か
わ
り

情^イ
人^ロ
と
逢
う
隙
も
あ
た
え
ず
且
那
来
る

他
所
さ
ま
の
見
る
ほ
ど
二
号
貰
ろ
て
い
ず

淋しさを女も酒にして唄い

けいこ屋の猫も色ごと聞かされる

流れ

丸尾潮花

通夜の
お茶冷め
とうな
って捨
てられ
る

アロハ
着て出
ればア
ロハの
口をき
き

いく
らか
にし
て来
る心算
化粧
する

色男にされて四十の顔を剃り

生きてゐる悲しみ金に手をつかえ

公傷は陽のある門をくぐり抜け

流れ

丸尾潮花

九死に得た一生ながら
もてあまし

親娘ほど違えば
旦那じむさく

あ　と　が　き

子供の頃からの友達である紫香と潮花と木客とが、川柳の門を叩いて以来三十年、各自の句風こそ変われ常に変らない友情を持ち続けたことは柳界にも珍らしい存在だと云われている。何時かは三人の句集をという夢が、この度び、恩師路郎先生の親身も及ばぬお力添えを得て実現することになった。

杉の苗木は一本だけ植えるより、何本か一緒に並べて植える方が、お互いに助け合つて、ずっと成長が早いということを聞いているので、それに因んで句集の名を「杉の子」にするか、或いは端的に「三人」としたいと考えていたが、先生は後の名を選んで下さった。

本句集には、おのおのの自選句のなかから、三人のカラーを生かすことを主眼に、先生に選んで戴いた六百余句を収録した。句はその内容によって、旅に生れたもの、

家庭を主題としたもの、恋をうたいあげたもの等、各自の好みによって区分けし、古い句もすべて新かな遣いに改めた。

病後なお御静養中の先生が、こちらで却ってハラハラするほどに、力を入れて下さる有難さ、先輩柳友の方々の温い励ましのある嬉しさ、それにつけても、三人の三人らしい雰囲気を多少とも感じとって戴ければ望外の喜びである。

昭和三十三年秋

正 本 水 客

黒 川 紫 香

丸 尾 潮 花

水―明治四〇年八月 大阪生・国鉄大阪鉄道管理局勤務
紫―明治四〇年八月 大阪生・京阪神急行電鉄勤務
潮―明治四一年三月 明石生・日立造船徳島工場勤務

昭和三十三年十月廿八日
昭和三十三年十一月三日

印刷
發行

定價 二百円

三人 川柳集

著者
著者
著者

正^{まさ}本^{もと}水^{みづ}客^{きやく}
黒^{くろ}川^{かわ}紫^し香^{かう}
丸^{まる}尾^お潮^{ちよう}花^か

発行者

大阪市住吉区万代西五丁目二五
川柳句集「三人」刊行会

発行者

大阪市住吉区万代西五丁目二五
川柳雑誌社

電話 大阪 六〇八一番
振替 大阪 七五〇五〇番

麻生路郎★主宰

創刊大正十三年

川柳の雑誌

文化人必読の柳誌

- ★ 川柳の社会化を主唱し実現させた本誌
- ★ 創刊以来初心者 の指導に意を凝ぎ新進柳人の登竜門となった本誌
- ★ 創作・研究・随筆に多くの誌面を割愛して、川柳内容の向上に資している本誌
- ★ 最高の内容で而も低廉・即刻購読あれ

定価 一 六四円（税共）
半力年 三八四円（税共）
一力年 七二〇円（税共）

大阪市住吉区万代西五丁目二五

発行所 川柳雑誌社

電話 大阪 六〇八一
振替 大阪 七五〇五〇



8